令和元年度　伝統芸能文化創生プロジェクト
「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」事業報告書

新内節の発信と保存プロジェクト

伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス
（京都市、京都芸術センター）

令和３年３月

報告　細野桜子（新内志賀桜）

目次

１．新内節をめぐる状況と本プロジェクトの概要
１－１　新内節とは …… 1
１－２　現状の問題 …… 1
１－３　「新内節の発信と保存プロジェクト」について …… 2

２．連続講座「新内節を語る」
２－１　概要と意義 …… 4
２－２　各回の概要 …… 5
２－３　YouTube チャンネルについて …… 7
２－４　記録冊子『新内節を語る　講話録』について …… 7

３．音源と楽譜のアーカイブ化
３－１　伝承形態と楽譜資料の現状 …… 8
３－２　楽譜化の方法 …… 9
３－３　録音 …… 15
３－４　ウェブサイト …… 16

４．あとがき …… 17

資料 …… 19

１．新内節をめぐる状況と本プロジェクトの概要

１－１　新内節とは

新内節は、京都で誕生した一中節から独立した宮古路豊後掾（みやこじぶんごのじょう）が興した豊後節（江戸浄瑠璃とも呼ばれている）から、18 世紀後期に派生した浄瑠璃のひとつである。現在の「新内節」という名称は、文化年間に鶴賀若狭掾（つるがわかさのじょう）の門人で、人気を博した美声の演奏家である鶴賀新内に由来している。また、当時の同系統の富士松節、鶴賀節、豊島節を総称し、さらに後年富士松魯中系（ふじまつろちゅう）（現在では新内節の中興の祖とも呼ばれている）がとなえた富士松浄瑠璃も含めて「新内節」と呼ばれている。新内節は、以上のことから「豊後節系浄瑠璃」とも呼ばれる。同じく豊後節から派生した、現在の清元節、常磐津節と同じく劇場音楽のひとつとして舞台に上がっていたが、早々に座敷浄瑠璃に転向した。

旧来の豊後節のフレーズをより扇情的なものにし、物語の人物の心情などを語る楽曲の中心部分である「クドキ」に残した。さらに楽曲の題材で実際の心中沙汰を脚色して取り上げることで、江戸時代の庶民から人気があった。

現在でも、始祖である初代鶴賀若狭掾が作曲した《若木仇名草》（蘭蝶）や《明烏夢泡雪（あけがらすゆめのあわゆき）》などは、一段にまとめられていることから「端物」と呼ばれている。これらは現在でも代表的な曲とされ、新内節の基本的な構成形態とみることができる。端物の他にも、楽曲の内容に応じていくつかのジャンルが存在し、義太夫の楽曲が基になった「段物」、めでたい内容の「御祝儀曲」、滑稽な話の「チャリもの」など数多くのジャンルの楽曲が伝承されている。曲数は、明治期までの作曲として 50 曲程度伝承されているが、以後も様々な演奏家によって作曲されてきた。それらの楽曲は、作曲者の流派の固有の楽曲として伝承されているため、新内節全体の楽曲数は正確に数えることが難しい状態である。

１－２　現状の問題

新内節は、他の多くの伝統芸能と同様の問題を抱えている。

1 つ目が、伝承者の減少である。現在、新内節の諸流派の連携を目的とした組織である「新内協会」の人数は 500 名以下である（『会員めいぼ』新内協会編、2019）。これは、演奏家だけではなくそれぞれの流派にいる名取りや素人、賛助も含めた人数だ。演奏家として活動している多くは 70 代を超え、若手演奏家と呼ばれる年齢は 50 代以上が主立っている。本 20～30 代の演奏家は、数名しか存在していない。

2 つ目が発信力の低さだ。新内協会にはウェブサイトや SNS はなく、先述の通り演奏家の高齢化が進んでいるため、それぞれの流派や演奏家個人がインターネット上で発信している例は非常に少ない。また、演奏家が少ないことに関しては、開かれていない伝承方法が継承者の減少を加速させていると考えられる。

３つ目が音源や楽譜が整備されていないということである。他の三味線音楽と違い、新内節には演奏家同士が共通言語として使用できる楽譜が存在しないのである。新内節の伝承で江戸期より使用していた正本には、曲譜（節についた名称）と詞章が併記されている。しかし、正本の曲譜は伝承を重ねるにつれて形骸化している部分も多く、現在では一部しか使用されないものもある。曲譜に関して詳細に研究されている本として、岡本文弥（岡本流）が著した『新内曲符考』があるが、これはあくまでも岡本流の研究書である。新内節の伝承方法は流派ごとに異なるが、その多くは、それぞれの流派の私家版の楽譜を使用するというものである。これは、新内節の市販されている楽譜が少ないからである。８冊（内、詞章のみ明記された楽譜は７冊）あるが、前述の例の通り、すべての流派がその楽譜を使用しているわけではない。また、LP やカセットテープの音源が多く発売されてはいるが、CD に収録されている音源には偏りがある。新内節の楽曲には１時間を超えるものが多く存在するため、楽曲の一部の省略演奏が求められることも少なくない。

１－３　「新内節の発信と保存プロジェクト」について

以上の問題に対して、本プロジェクトでは以下の３つの取り組みを行った。

１）連続講座「新内節を語る」の実施
２）楽譜と音源のアーカイブ化
３）インターネット上の広報強化

１)「連続講座「新内節を語る」の実施」は、各流派間のネットワークを構築していくための前段階として行うものである。実のところ、当初は新内協会に所属している各流派の情報をまとめた新内節総合ウェブサイトを作る予定であったが、本プロジェクトの初期段階で、それを実現するためには各流派との意見交換や問題意識の共有を行い、家元同士が協力して新内節業界全体の課題を解決していくための土台を築き上げる必要があることがわかった。そこで、若手～中堅を中心にいくつかの流派の家元を招き、それぞれが現在置かれている状況についての報告と談論を行ない、一般に公開できる部分については演奏を交えながら鼎談する形式の講座を開催することにした。

2)「楽譜と音源のアーカイブ化」については、新内節には流派や演奏家ごとに語りに多少の違いが存在しており、それに伴って三味線の旋律も変わってくることが関係してくる。つまり新内節にはそのように即興性が求められるために、覚え書きのような形でしか楽譜が残されてこなかったが、本プロジェクトでは、お稽古をする際に初心者でもそれを読んで演奏し、自身の習練度が把握できるようにすることを目指して楽譜を作成した。さらに、個人の芸として完成されている市販の音源に加えて、新しく作成した楽譜に則った演奏を録音

することで、より稽古に向いた音源を作成した。

3)「インターネット上の広報強化」では、Instagram で写真・画像を用いて新内節の現在を発信するとともに、新しく作成した研進派のウェブサイトで、2)のアーカイブを順次公開していく。また本プロジェクトの YouTube チャンネルでは、連続講座「新内節を語る」の記録動画を配信するだけでなく、他コンテンツを充実させていく予定である。

新内節の発信と保存プロジェクト

代表　新内志賀（しんない　しが）

幼少期より江戸浄瑠璃新内節を研進派初代家元・新内志賀大掾（しがのだいじょう）及び新派家元・富士松菊三郎に師事。小唄を里園派宗家・里園志寿栄（さとぞのしずえ）及び里園志寿華（しずか）に師事。2012 年研進派家元。新内志賀の襲名を果たし、現在は一門の指導・育成に献身している。本名の重森三果名義では、文学作品に脚色を施した作品や、書き下ろしの楽曲を精力的に発表。数多くの映画・テレビ等において邦楽指導、演奏出演している。2014 年文化庁芸術祭音楽部門優秀賞受賞。

細野桜子（ほその　さくらこ）（新内志賀桜（しがおう））

4 歳より新内志賀師に師事。2017 年東京藝術大学(長唄三味線専攻)卒業。長唄を稀音家（きねや）温子（あつこ）師、東音新井康子（あらいやすこ）師に師事。2019 年京都市立芸術大学(日本音楽研究専攻)修士課程終了。東洋音楽学会正会員。2019 年度京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究員(竹内研究室)。

２．連続講座「新内節を語る」

２－１　概要と意義

連続講座「新内節を語る」では、各回異なる若手演奏家の講師を招き、それぞれにテーマを設定して、新内節の現状と将来の展望についての鼎談と実演を一般公開した。演奏家は、普段はお客さんの前で自身のことや流派のこと、稽古の様子や師匠との関係などについて語ることが滅多にないため、業界内の事情を知るには関係者から個人的に話を聞いたり、実際に自らが弟子入りして身をもって体験したりするしか方法はない。そこで新内節のことを一般に知ってもらう機会を設けるとともに、現在の新内節の状況を多くの講師から聴取するために本講座を企画した。この鼎談の内容は別冊子『新内節を語る　講話録』に収録する他、YouTube の「新内節の発信と保存プロジェクト」チャンネルでも動画配信している。

「新内節を語る」では、新内志賀と細野桜子（新内志賀桜）が聞き手になり各回のテーマに関する質問を講師に投げかけ、より掘り下げて話してもらうよう促すことに加えて、一般のお客さんにもわかりやすいように用語の説明などを行った。実演は、出来る限り楽曲の演奏の範囲が被らないことや、演奏は 15 分程度にすることなどを条件に、ゲストの演奏家に楽曲の選曲を委ねた。

質問は、全ての回に共通する項目と、各回のテーマに沿った項目から構成される。共通の質問としては、各自の師匠とどのように出会ったか、お稽古の中でしきたりや芸事の習慣をどのように学んだのか、芸歴、各流派の伝承形態、将来の展望などである。

連続講座「新内節を語る」チラシ

２－２　各回の概要

第１回「我が師を語る」
日時：2020 年 1 月 25 日（土）
　　15：00～16：30
会場：京都芸術センター　和室「明倫」
講師：鶴賀伊勢吉（鶴賀流分家家元）
実演：《若木仇名草》（蘭蝶）（お宮口説）

伊勢吉師は、鶴賀伊勢一郎を通して新内節に出会い、後に第 11 代鶴賀若狭掾の弟子となり、三味線方として鶴賀伊勢次郎の名でデビュー。現在では、鶴賀伊勢吉と改め、浄瑠璃方として活動している。

今回のテーマは、新内節の師弟関係と伝承のあり方である。存命の新内節演奏者では最高峰とされる鶴賀若狭掾に弟子入りした鶴賀伊勢吉を講師に招き、師弟関係のことや、芸を継承すること、太夫と三味線方の二つの立場で演奏を行なう活動などについて質問した。三味線音楽の多くは、三味線方と浄瑠璃方（語り）の分業制になっている。プロを目指して三味線方と浄瑠璃方をどちらも修行する場合、新内節では師事された師匠と相談の上、流派の違う複数人の師匠に師事することがある。伊勢吉師は、三味線方も修行するために、当時鶴賀若狭掾の相三味線を務めた、三味線方の先代新内勝一朗（後の新内節勝新派宗家、新内勝凰）のもとで修行をした経験があるため、そのような「留学」における師弟関係の話もうかがった。

———

第２回「創作を語る」
日時：2020 年 2 月 11 日（火・祝）
　　15：00～17：00
会場：京都芸術センター　大広間
講師：岡本宮之助（岡本流主幹）、
ゲスト：細川周平（国際日本文化研究センター教授）
実演：「のぼうる」など（助演：岡本宮慶）

宮之助師は、大叔父の岡本文弥、祖母の五世宮染に師事し、岡本文弥と親交の深かった邦楽演奏家平井澄子に薫陶を受ける。岡本流以外では演奏不可能になった多くの浄瑠璃を継承している。

この回では、2 部制のトークを行なった。第 1 部では、新内節の演奏家の中でも昭和期に活躍した岡本文弥が残した 300 曲の作曲のお話と、現在岡本流を継承しながら自身も創作に邁進している宮之助師に創作のプロセスをうかがった。第二部では、日本を代表する音楽学者である細川周平氏を招き、新内節の現状について多角的に語り合った。

———

第 3 回「女流を語る」
日時：2020 年 10 月 18 日（日）
　　15:00～16:30
会場：京都芸術センター　大広間
講師：富士松菊子（新派家元）
実演：《若木仇名草》（蘭蝶）（心中場）

菊子師は、最初長唄三味線の演奏家である杵屋勝七郎師に師事され、後に劇団新派の舞台で共演した富士松菊三郎師（新派宗家）に弟子入りする。三味線方の演奏家で志賀と度々共演をするが、浄瑠璃方を研鑽し、家元となってからは浄瑠璃方として活動している。

第 3 回は、当初 2020 年 3 月 11 日（水）に行われる予定だったが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため延期となった。長唄という別のジャンルから転向して現在新内節の演奏家として活躍している菊子師を迎え、女性が舞台に上がるのが難しい歌舞伎で演奏する機会の多い長唄と新内節の違いをテーマとした。

———

特別編「新内節を語る」
日時：2020 年 8 月 23 日（日）15:00～17:00
会場：京都芸術センター　大広間
講師：鶴賀若狭掾（鶴賀流第 11 代家元、新内節人間国宝）、鶴賀伊勢吉（鶴賀流分家家元）
実演：《若木仇名草》（蘭蝶）（お宮口説）、「一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）」

若狭掾師は、父である初代鶴賀伊勢太夫、8 世鶴賀若狭掾、鶴賀加賀八太夫らに師事し、ＮＨＫ邦楽技能者育成会に入会。初代鶴賀太夫死去の後、2 世鶴賀伊勢太夫を襲名。2000 年に新内界の一代名跡である 11 世鶴賀若狭掾の襲名、翌年の 2001 年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される。2009 年文化庁文化交流史に指名され、海外公演を行なう。

現在、新内協会理事長を務めている。

この回は当初、2020 年 7 月にオープンしたヒューリックホール京都で公演する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、一般観客を入れずに京都芸術センター大広間にて無観客で行なった。

２－３　YouTube チャンネルについて

連続講座「新内節を語る」全 4 回は、YouTube「新内節の発信と保存プロジェクト」チャンネルで動画配信している。新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、延期となった第３回「女流を語る」は定員を制限して行った他、特別編については一般公開を中止して動画配信のみでの実施となった。今後も他流派の講師を招いた講座を継続したり、研進派の演奏会などをアップロードしたりするなどして、新内節を見ることが出来る機会を少しでも増やしていきたいと考えている。

YouTube「新内節の発信と保存プロジェクト」チャンネル

QR コード

２－４　記録冊子『新内節を語る　講話録』について

連続講座「新内節を語る」の鼎談の内容を収録した冊子を作成し、新内節の演奏家の現在がわかる芸談録として新内節関係者のみならず一般に配布している。研進派ウェブサイト上でも閲覧することができるようにし、演奏を聞くだけではなく、演奏家にも興味を持ってもらうための一助とした。

『新内節を語る　講話録』

３．楽譜と音源のアーカイブ化

３－１　伝承形態と楽譜資料の現状

新内節の各流派は、基本的にそれぞれの伝承に則って活動している。そのため、後述の長唄の場合と同様に、本来的には流派ごとの楽譜が必要になるはずである。実際に、流派によってはその流派に所属している有力な演奏家が作成した自筆の楽譜を流派内で共有して使用することがある。しかし、新内節の場合は、長唄のように稽古人口が多くはないため、長唄のように多くの楽譜が出版されることはなく、勢力のある流派の出版譜に影響を受けるようなことはなかったのである。結果として、現在まで 14 もの諸流派がそれぞれの伝承を踏まえた特色を出すことに繋がった一面があるのではないかと考える。

例えば、同じ三味線音楽の一つである長唄は基本的に四分の二拍子を一小節単位として記譜することが出来る。そのため市販されている楽譜も数多く存在する。通称「研精会譜」と呼ばれる楽譜（初世吉住小十郎が大正期に考案、縦書き）には 80 曲程度の曲目が収められており、同じく縦書きの通称「青柳譜」（初世杵屋彌之介が昭和初期に考案、縦書き）も 80 曲以上、そして後で詳述する「（三味線）文化譜」（4 世杵家弥七が大正後期に考案、横書き）もまた 80 曲程度の曲目を収録して出版されている。それぞれの伝承を踏まえて作られたこれらの楽譜は、いずれも曲目ごとに三味線の手付けと唄の節付けを記譜しており、それぞれの基本的な記譜法さえ理解すれば、一つの曲目を自習し、かろうじて演奏することができるのである。

それに対して、新内節では、楽譜らしい楽譜は出版されてこなかった。江戸期に出版された『新内正本』は、主に詞章の公開と語りの稽古に便宜をはかることを目的としたもので、三味線の手付けないし語りの節付けの、ごく一部分を指し示す文字譜・記号・調弦などが印刷されていることもある。しかし、音楽的情報が圧倒的に不足しているので、それを見たところで音を再現するのは不可能に近く、楽曲演奏に役立つような譜面とはいえない。明治期以降の事例では、『新内稽古本』（全七冊、全一八曲、初版年未詳、邦楽社）のように稽古や舞台での床本として使うことを目的としたとみられる和装の出版物があるが、詞章と調弦が記載されているだけで、三味線の節付けが記されているわけではない。

このような中、一つの極めて貴重な楽譜が出版されている。それは、昭和 41（1966）年に邦楽社から出版された『三味線文化譜　新内の流し・前弾き集』（町田佳聲編、以降『新内前弾き集』と称する）である。この楽譜集は、新内節の特徴的な器楽部分である「流し」と「前弾き」のみを収録したもので、三味線の勘所（ツボ）が記譜されている。ところが、新内節の演奏自体に即興的な要素があるために、この楽譜と同じ音源は存在していない。したがって、新内節には、楽譜と呼べるようなものは皆無ではないが、演奏目的のものは極めて稀である。

３－２　楽譜化の方法

楽譜と音源を作成することによって、口頭伝承では不明瞭だった音楽的特徴が明らかになるだけでなく、現在演奏されなくなった楽曲の保存と継承を促すことにも寄与すると考える。研究者のためだけでなく演奏家にも寄与できるように、それを用いて自習できるような楽譜と音源を目指した。

（１）楽譜の種類と記譜法

一般的に三味線音楽を記譜する方法は様々であるが、その代表的なものとして、五線譜、研精会譜、文化譜などがある。今回は、以下で述べるような理由により、文化譜の記譜法を用いることにした。

五線譜での採譜は、しばしば新内節の先行研究（町田佳聲「新内節に関する考察」1916年など）に用いられている。これは、音楽の研究者をはじめ五線譜を理解出来る人には極めて分かりやすいと思われるかもしれないが、今回には適していない点がある。それは、多くの三味線音楽において、三味線という楽器がヴァイオリンなどのように絶対的な基準音（1つの弦がいつも決まったピッチで調弦される）を設定しないことに起因する採譜と譜読みの困難さである。つまり、新内節の三味線の調弦はその都度語り手の声域に三味線の音域を合わせて行うため、五線譜に記譜する際にも、五線譜を読み解く際にも、演奏ごとの基準音の違いに留意して常に演奏の実音と楽譜上の音との差異を前提に楽譜に向き合わなければならないのである（楽譜を移調しながら読み書きするような感覚になる）。この問題から、文化譜は多くの新内節の演奏家にとって使いにくく、場合によっては誤読や誤解を生じさせやすいのではないだろうか。

次に、研精会譜については、縦書きなので一見すると伝統的な三味線の楽譜のようにみえる。しかし、おおまかにいえばむしろ五線譜の方とよく似ていて、音名でいうC（ド）からB（シ）までを1から7までの数字であらわすが、記譜の数字と実音とのピッチの差異を常に意識してかからなければならない点は、五線譜と同様の問題である。

これらの点から、「五線譜」も「研精会譜」も新内節の演奏家の間ではほとんど使われていないようである。ただし、「五線譜」は音楽研究者や現代邦楽の作曲家・演奏家にとって共通言語であり、音程関係が視覚的につかみやすいという大きな利点がある。将来的には五線譜の活用も視野に入れ、活動の内容によっては積極的に取り入れていくべきであろう。

（２）文化譜の利点

新内節の演奏家の間で最も多く使われている記譜法は、文化譜（またはそれに類似したもの）であろう。文化譜は、大正年間に4世杵家弥七によって考案されたもので、町田佳聲監修『改訂版　文化譜による三味線手ほどき』（1968年）（以降、『三味線手ほどき』と呼ぶ）

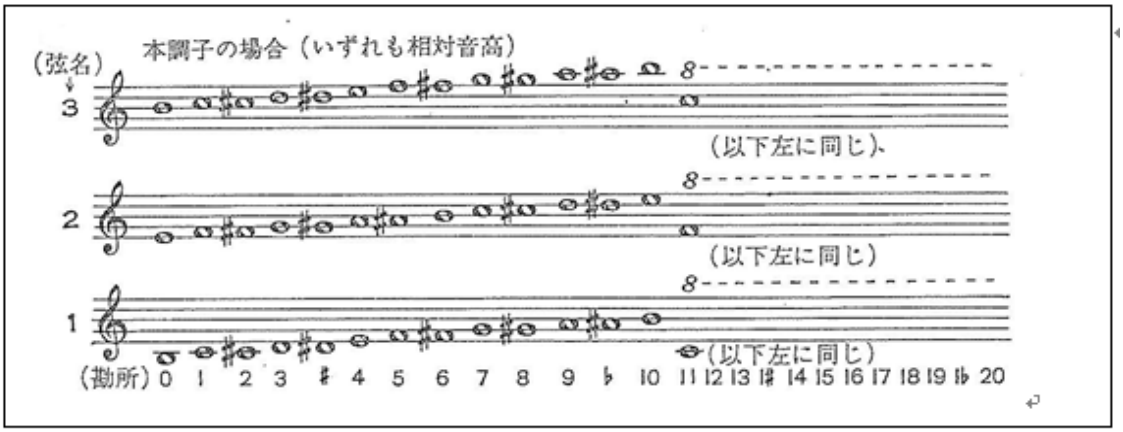
に示されているように、三味線の勘所（指で押さえる棹の位置）を数字で示したタブラチュア譜の一種である。文化譜では、開放弦を０とし、１、２、３……18 のように、勘所を算用数字で示す。３と４の間の勘所は♯、９と 10 の間の勘所は♭を使用する。このような勘所を表す数字は、３本の横線上に配置して記される。３本の横線は、三味線に張られた３本の弦（糸）に見立てられている。下から順に、一の糸という弦名の低音域弦、二の糸という弦名の中音域弦、三の糸という弦名の高音域弦を表す。

指の動きの感覚から三味線の手付けが直感的に理解しやすいという長所があり、調弦のピッチ（基準音）が変化しても記譜される数字は変わらないので、譜の読み書きがしやすいという利点がある。

（３）文化譜と五線譜の対応関係

前述のように今回は基本的に五線譜を記載しないので、譜読みの便宜のために文化譜の表記法を五線譜で表すと【表１】のようになる。三味線の調弦に際し基準音となる最低音域弦（一の糸）のピッチ（音高）は、語り手の声域や会場の音響等との兼ね合いで、演奏の都度、調整する。以下の対照表は、一の糸の開放弦（弦名１の「０」の勘所）をＢ音（シ）に合わせた場合の一例である。

【表１】文化譜と五線譜の対照表

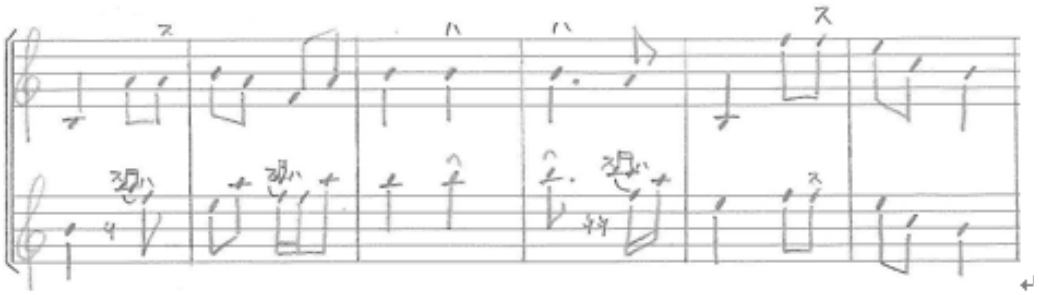


出典：星旭『日本音楽の歴史と鑑賞』（昭和 46（1971）年、音楽之友社、159 頁）

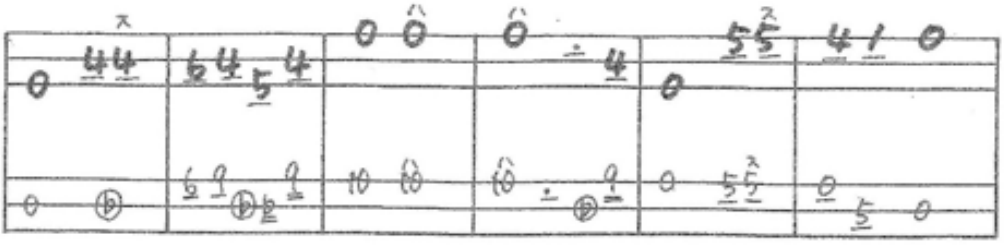
以下（次ページ）の引用譜は、「前弾き」と呼ばれる新内節の器楽部分の一部を五線譜と文化譜で表したものである。

【引用譜１】は、前弾き〈菊水〉について、富士松菊三郎師（新派宗家）が作成した自筆の文化譜を、細野が五線譜に訳した楽譜である。【引用譜２】は、【引用譜１】と同じ部分について、菊三郎師の同じ自筆文化譜を転写したものである。

【引用譜１】五線譜による記譜例。新内節の前弾き〈菊水〉冒頭より。



【引用譜２】文化譜による記譜例。新内節の前弾き〈菊水〉冒頭より。



【引用譜１】【引用譜２】とも、上段が本手三味線の手付け、下段が後述する上調子の手付けである。

この楽譜に記載した部分は、新内節の前弾きのごく一部分であるが、新内節とその前弾きの特徴が良くあらわれている。この訳譜の第１、２、４小節にある複前打音の装飾音を見ていただきたい。このような連続的な装飾音が、パターン化した決まったフレーズの中に組み込まれて出現するのである。

この装飾音は、採譜すると細かい表記が必要になるが、五線譜だけでなく文化譜でもあらわすことができる。文化譜で装飾音をあらわすときは、丸印の中に勘所の♭を入れた記号を使用する。この書き方は、菊三郎師が文化譜にアレンジを加えたものである。文化譜は、このような工夫を交えることにより、五線譜と同等な細かい表現を書き表すことも可能である。

（４）上調子とその記譜

現在の新内節は２挺１枚、すなわち浄瑠璃方１名、三味線方２名の演奏を基本とすることが多い。三味線方は、１人が本手三味線という主旋律を演奏し、もう１人が上調子という副旋律を演奏する。双方の演奏時の関係を楽譜で示すと、前述の【引用譜１、２】の上

段（本手）と下段（上調子）のような関係になる。

この上調子の三味線は高音（たかね）とも呼ばれ、三味線の４の勘所のあたりに枷と呼ばれるものを付けることで振動する弦を短くし、調弦も本手三味線より開放弦を完全４度、もしくは完全５度高くし、結果的に本手三味線よりオクターブ上の音域を演奏するのである。音域の違いのほか、旋律も少々違っている。つまり、上調子の勘所と旋律は、本手三味線のそれとは異なっているので、上調子専用の楽譜を作成する必要がある。

この上調子の部分の楽譜は『三味線手ほどき』には記譜の例が載っていないが、同じ邦楽社で出版されている『新内前弾き集』の上調子の楽譜は、枷をつけた勘所以降を開放弦の０の後、１、２、３……となるため、本手三味線の勘所との関係が直感的に捉えにくくなり、使いにくいという声もある。

これに対し、富士松菊三郎師が自身で作成した楽譜は、本手三味線とおなじ勘所を表記し、開放弦の０の後５、６、７…と表記されている。このため、演奏する際に新しく勘所を覚える必要がなく非常に演奏がしやすい。今回の採譜は上調子の部分に関しては、富士松菊三郎師の記譜法を使用することにした。

（５）楽譜化した楽曲

大学ノートに文化譜の特徴である三線を書いて楽譜を作成した。床本が存在する語りの節付けは詞章のみにして記をせず、三味線の手付けの記譜を重要視している。三味線音楽の楽譜は、節付けは手付けよりも曖昧に表記されていることが多く、それぞれの伝承に委ねられる部分が多い。

小節線は、文字譜などのフレーズに区切ることを基本的原則に、場合によってはそれよりも細かく区切るようになっている。２年間という期間の中で採譜を行なっているため、楽譜は細かな改良が都度重ねられている。例えば、シメル（ritardando に近い意味）には二重線を加えるといった点は、採譜を始めて随分経ってから始めたものである。

以上のような方法で、新内志賀大掾による床本に基づいた新内志賀による継承で、文化譜の基本的記譜法に則り、三味線の本手・上調子の旋律を追加した楽譜を作成していった。古典曲と呼ばれるものは、平凡社から出版されている日本音楽大事典の付表『新内節曲目表』（表２、次ページ）に則り 20 曲程度、新曲については大正期以降で昭和期に作曲された舞踊曲、新内志賀大掾が作曲した《志賀の里》《黒船お吉》《下田慕情》や新内小曲などを含め 25 曲を楽譜化した。具体的な曲名については、現在、権利関係を確認中（太夫が浄瑠璃部分の節を考案し、三味線弾きが三味線の手を付けたと思われる曲など著作関係が複雑で、当事者が亡くなっている）であるため、ここで全てを挙げることはできない。

【表２】新内節の楽曲表

出典：竹内道敬作成、『日本音楽大事典』付表＋図録、平凡社、106 頁

新内節曲目表

竹内道敬作成

作曲		本名題	読み	通称	作曲年代	備考
初代鶴賀若狭掾直伝	•	明烏夢泡雪	あけがらすゆめのあわゆき	明烏		
〃	•	若木仇名草	わかきのあだなぐさ	蘭螺		
〃	•	帰咲名残命毛	かえりざきなごりのいのちげ	尾上伊太八，伊太八		
〃		男作出世員唄	おとこだてしゅっせのかぞえうた	白藤源太		
〃	•	傾城音羽滝	けいせいおとわのたき	淡島，音羽丹七		
〃		二重衣恋占	ふたえぎぬこいのうらかた	花咲綱五郎		
〃		二重形扇屋染	ふたえがたおうぎやぞめ	摺鉢無間鐘		
〃		仇比恋浮橋	あだくらべこいのうきはし	仇くらべ		
〃	•	千日寺名残鐘	せんにちでらなごりのかね	三勝縁切		
〃	•	日高川嫉妬の段	ひだかがわしっとのだん	日高川		
〃		釜淵双級巴	かまがふちふたつどもえ	石川五右衛門（ただし，継子責，お滝殺し，釜煎を含む）		
〃		不心底閻魔	ぶしんていやみのあわび	不心中鑑		
〃		比翼の初旅	ひよくのはつたび	桶伏鯉		
〃		恋衣対の白無垢	こいごろもついのしろむく	白むく		
〃		朝比奈地獄破	あさひなじごくやぶり	朝比奈		
〃	•	鬼怒川物語	きぬがわものがたり	累ヶ（ただし，かさね身売，土橋ヶを含む）		
〃		唐模様形見振袖	からもようかたみのふりそで	唐模様		
〃	•	恋娘昔八丈	こいむすめむかしはちじょう	お駒，お駒才三（ただし，城木屋，婿入，鈴ヶ森を含む）		
〃	•	関取千両幟	せきとりせんりょうのぼり	千両幟（ただし，稲川内侍，相撲場踊を含む）		
〃		双紋刀銘月	ふたつもんかたなのめいげつ	お花半七		
〃		傾城三度笠	けいせいさんどがさ	梅川，新口村忠兵		
〃		一谷嫩軍記	いちのたにふたばぐんき	一の谷		
初代鶴賀新内直伝		藤蔓恋の柵	ふじかずらこいのしがらみ	藤かづら		
〃		桂川恋散柳	かつらがわこいちるやなぎ	白玉お半		
2代鶴賀鶴吉直伝		子宝三番叟	こだからさんばそう	子宝		
〃		里空夢夜桜	さとのそらゆめのよざくら	夜桜		
富士松魯中		名物姥ヶ餅	めいぶつうばがもち	姥ヶ餅		
〃		染模様妹背門松	そめもようういもせのかどまつ	質見世		
〃		鬼怒川昔噺	きぬがわむかしのうわさ	法印場		
〃		廓文章	くるわぶんしょう	夕ぎり		
〃	•	道中膝栗毛	どうちゅうひざくりげ	弥次喜多，膝栗毛（ただし，組討，市子笛，赤坂並木を含む）	1857（安政４）刊	
〃		苅萱桑門筑紫慶	かるかやどうしんつくしのいえづと	高野山，石童丸		
〃		生写朝顔日記	しょうううつしあさがおにっき	朝顔，朝顔日記		
〃	•	不断桜下総土産	ふだんざくらしもうさみやげ	佐倉宗吾郎（ただし，宗吾住家，子別れを含む）	1856（安政３）	
〃		八重霞浪花浜荻	やえがすみなにわのはまおぎ	新屋敷，かしく，お園六三		
〃	•	明烏後真夢	あけがらすのちのまさゆめ	真夢		
〃		名残の姿見	なごりのすがたみ	小春髪梳	1857（安政４）刊	
〃		道行花島台	みちゆきはなのしまだい	花咲道行，花咲綱五郎とも	1856（安政３）	
〃		昔噺石の枕	むかしうわさいしのまくら	一つ家	〃	
〃		加賀見山旧錦絵	かがみやまこきょうのにしきえ	鏡山，加賀見山とも（ただし，長局，草履打を含む）		
〃		昔噺唐絵皿	むかしうわさからえのさら	鉄山		
〃		藍染野中の隠井	あかねぞめのなかのかくれい	梅の由兵衛，長吉殺し		
魯中作か		翁	おきな			
〃		むしろ田	むしろだ			御祝儀曲
〃		宝船	たからぶね			〃
〃		廓七草（種）	くるわななくさ			〃
5世富士松加賀太夫		浪枕浮名高橋	なみまくらうきなのたかはし	高橋お伝	1881（明治14）	
〃	•	梅雨衣酔月情話	つゆごろもすいげつじょうわ	花井お梅（ただし，大川端，自訴場を含む）	1888（明治21）	

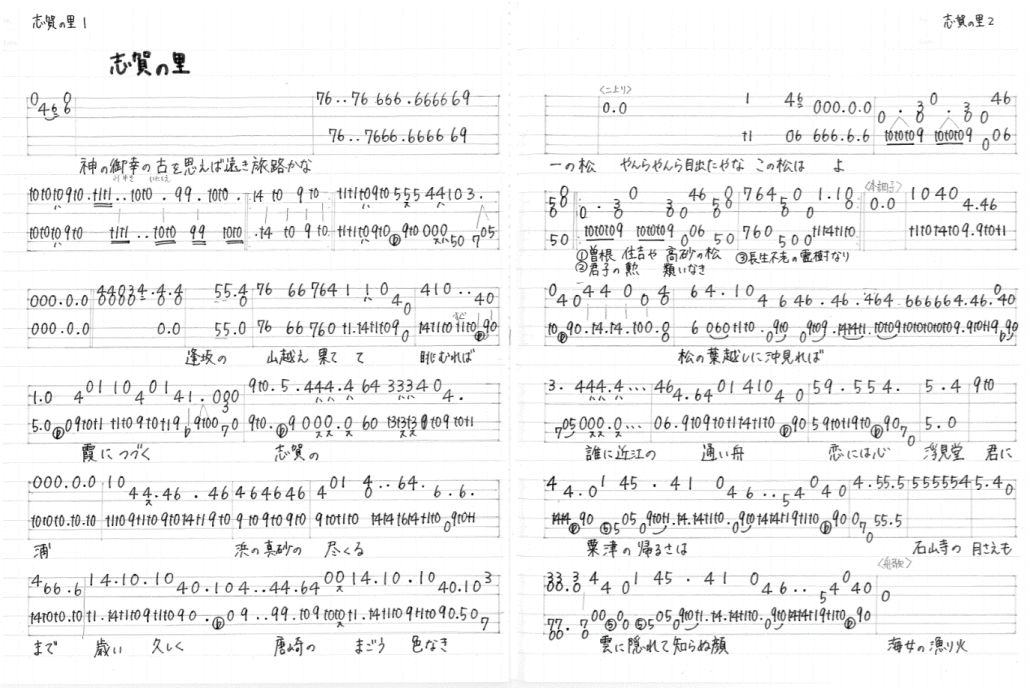
（以下略，第二次世界大戦後に新作多し）

注　•代表曲を示す

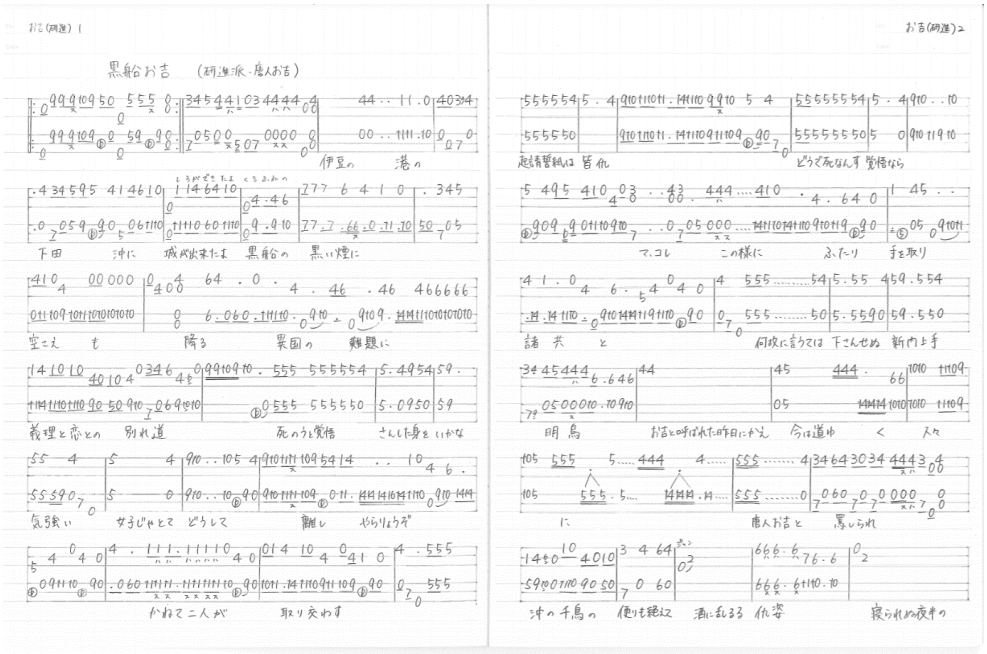
付表＋系図 | 106

ただし、参考として、2020 年 4 月に採譜した二曲の引用譜を載せておく。新内志賀大掾が作曲したご祝儀曲の《志賀の里》と、唐人お吉を題材にした《黒船お吉》である。楽譜は細野による手書きでの採譜をスキャンし PDF 化を行なった。

【引用譜３】新内志賀大掾作曲《志賀の里》冒頭より



【引用譜４】新内志賀大掾作曲《黒船お吉》冒頭より



３－３　録音

楽譜を作成した 45 曲については、その楽譜に忠実な音源（語り・本手の弾き語りを新内志賀、上調子は新内志賀桜）を新しく録音し、MP3 で保存している。楽譜と音源は今のところ研進派のみで閲覧・ダウンロードができるようにグーグルドライブ上にアップロードしている。

前出の【表２】の新内節の楽曲表に掲載されている古典曲を例に、録音で心がけたことを以下に記す。

初代鶴賀若狭掾が作曲した《明烏夢泡雪（あけがらすゆめのあわゆき）》では、「上：部屋の段」と「下：雪責の段」だけでなく、演奏時間の制約から舞台では省略されることの多い上と下の間のくだりなども録音した。基本的な方針として、古典曲については、現代において抜き差し演奏で省略される箇所も全て録音することにした。《若木仇名草》（蘭蝶）についても、現在は分けて演奏される「上：四谷」「中：お宮口説き」「下：心中場」の「口説き」と言われる部分を抽出するのではなく、全段を通しで記録した。そのほか、初代若狭掾作品では《帰咲名残命毛（かえりざきなごりのいのちげ）》（現在では上演されることが少ない伊太八の口説きを含む）や《千日寺名残鐘（せんにちでらなごりのかね）》も全段通しで録音した。

また、当代の若狭掾が演奏した音源には、三味線ならびに節において今の研進派とは微妙に異なる箇所がある。その場合は、新内志賀が志賀大掾から伝承した演奏を録音した。《恋娘昔八丈（こいむすめむかしはちじょう）》については、「鈴ヶ森の段」の二上がり部分は現在では割愛されることが多い。しかし、地味ながらも非常に技巧的な節回しが見られるために、志賀大掾の演奏を踏襲して録音した。他に、《日高川》《傾城三度笠（けいせいさんどかさ）》《関取千両幟（せきとりせんりょうのぼり）》なども、志賀大掾から習った楽曲である。《一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）》については、新派宗家の富士松菊三郎師から新内志賀が稽古をつけてもらった。菊三郎師から修得した曲は浄瑠璃方の諸派の芸系を受けており、節回しや三味線の間の運びや手付などは、新内志賀が習ったままの演奏法で録音した。他に、2 代目鶴賀鶴吉作《子宝三番叟》については、浄瑠璃は志賀大掾に、三味線は菊三郎師から新内志賀が伝承したものである。富士松魯中作《不断桜下総土産（ふだんざくらしもうさみやげ）》（佐倉惣五郎住処・子別れ）と《明烏後正夢（あけがらすのちのまさゆめ）》（道行・問弔い）、《道中膝栗毛》（弥次喜多）は志賀大掾から、《廓七草》《高野山》《廓文章》は菊三郎師から修得したものである。5 世富士松加賀太夫作《梅雨衣酔月情話（つゆごろもすいげつじょうわ）》については志賀大掾から習い覚えた節である。

【表２】の新内節の楽曲表に掲載されているもの以外には、研進派として演奏会での上演やおさらい会での演奏を行なったり、お稽古をしてもらったりした楽曲も録音した。通称《権八小紫》《おさん茂兵衛》《壺阪縁観音（つぼさかゆかりのかんのん）》《玄冶店（げんやだな）》《十六夜清心（いざよいせいしん）》《三千歳（みちとせ）》《鳥辺山（とりべの）》などの歌舞伎や人形浄瑠璃の人気演目から移された演目も録音リストに加えた。これらは曲の成立と作者について今後も研究・調査が必要だと考えている。

昭和に作られた曲については、岡本派以外の諸派で演奏される岡本文弥作《滝の白糸》も、

志賀大掾から習った楽曲として録音した。鶴賀朝太夫作《広重八景》《雷の道行》や 鶴賀新内作《 寿勢鳶（ことぶききおいとび） 》などは、新内節には珍しい舞踊のために作られた作品である。これらの楽曲は他流派のものだが、作曲者の三味線をつとめた富士松菊三郎師から新内志賀が習ったものであり、公開しないことを前提として、10 曲ほど録音した。

３－４　ウェブサイト

新内志賀大掾のアーカイブは楽曲の権利関係が整理でき次第、研進派ウェブサイトにアップしていく予定である。また、Instagram を開設し、アーカイブの状況や新内節の最新の情報をお知らせしている。

その他にも、Twitter、Facebook などを通じて、異なるユーザー層を考慮した情報を発信することを心がけている。 これらの SNS を通して、邦楽、日本舞踊、歌舞伎、文楽、能楽以外に、演劇、音楽、映画、美術などの表現者や愛好家とも交流し、伝統芸能だけでないパフォーミングアートのネットワークを作っていきたいと考えている。そのためにも、ハブとなるウェブサイトを、今後はより有意義に運営していかなければならない。

演奏活動や公演、客席数などの制限がなされている現在の状況下において、伝統的な分野においてこそウェブサイトや SNS を利用して情報を発信していく努力が必要だろう。

新内節研進派ウェブサイト

新内節研進派 Instagram

４．あとがき

新内志賀

新内節の発信と保存プロジェクト代表として、このプロジェクトを振り返ってあとがきとさせていただく。

まず申請時に私たちが目指していたこと、考えていたことから振り返ってみたい。

インターネットによる情報の発信は古典芸能においてもこれからますます必要になることが予想される。そのため、個別の流派による発信よりも、全ての流派の演奏家や演奏会の情報を一つのホームページに集約する方が、より有効な新内節の発信方法であろうと当初は考えていた。しかし、私の認識と力不足から、そのようなホームページの設置については流派間の総意は得ることはできなかった。

これがプロジェクト始動の最初の困難となった。けれども、その後、諸流派の先生方にご助言いただき、演奏家をゲスト講師として個別に招いて実演とトークによる連続講座を行うことで、プロジェクトを推進することができた。その関係者に対し、まず感謝を申し上げたい。

そして、一番大きな困難は、新型コロナウィルスによる文化芸術活動への影響であった。まず、2020 年 3 月に開催予定であった連続講座「新内節を語る」第 3 回「女流を語る」が 10 月に延期となった。そして新内節人間国宝である鶴賀若狭掾先生をお招きする 8 月の「新内節を語る　特別編」もその影響を受けた。元立誠小学校跡地に新しくオープンするヒューリックホールを会場として、立誠文化協議会と立誠自治連合会と連携して企画していたものの、感染症拡大防止のために「高瀬川夏祭り」が中止となることが決定し、それに伴い「新内節を語る　特別編」も中止となった。しかし、会場を京都芸術センターに移して同様の内容を記録撮影し、YouTube チャンネル「新内節の発信と保存プロジェクト」で動画配信することで対応した。

講座の実施がコロナによる影響を受ける一方で、私たちの流派に伝わる楽曲を中心にアーカイブの作成は粛々と進めていった。実演家としての演奏活動が全く無くなるという「自粛」のなかで生まれた時間が、むしろ作業の集中に功を奏したのであった。

私は語りと三味線を異なる芸系の二人の師匠に付いて研鑽してきた。浄瑠璃はもちろん語りの師匠の芸系を中心に学んできた。そして諸流派の浄瑠璃の先生方からの依頼で長年に渡り演奏や録音をおこなって来られた三味線方の師匠からは、我が派である研進派では演奏しない曲目を勉強させていただいた。その結果、江戸時代から 明治、大正、昭和の新作に至るまで数々の楽曲の演奏会の記録やお稽古のカセットなどが手元に残されており、それらをもとに、ながらく舞台演奏や稽古をする機会のなかった楽曲を再度勉強し直してアーカイブ作成を始めることにした。すると、対象とすべき楽曲が当初考えていたより広い

芸系にまで及んでいることがわかり、曲数も増えていった。もちろん、他の流派や著作者の権利などを守ることを考えて、アーカイブの扱いについては特に慎重を期すべきであることも、初動の「困難」から学ばせていただいた。

本プロジェクトに関連する他の助成としては、まず、「京都市文化芸術活動緊急奨励金」と文化庁の「文化芸術活動の継続支援事業」に採択していただいた。それにより、動画配信のための機材や人員の手配、SNS の積極的活用、アーカイブのためのデジタル環境等々を整えることができた。また、京都府文化活動継続支援補助金により、「こどものための新内節プロジェクト」を実施させていただいた。20 年近く前の拙作に「大江山の酒呑童子」という新作があり、それをこどもたちに楽しんでもらうために映像化・配信するという企画である。国際日本文化研究センターの協力のもと、酒呑童子の絵巻を目で追いながら新内節を楽しむことができるようにし、また、英語と日本語による字幕をつけることで日本文化を海外に発信することに努めている。

現在は募集は停止されているが、文化庁国内研修制度などの支援を得て、現在新内節三味線方として最若手である志賀桜とともに、志賀大掾が演奏しなかった古典曲を他派の諸流から学べることを願っている。

新内節は伝承者や観客の減少に直面している。私たちの社会の文化や経済などもコロナによって厳しい状況に見舞われている。そのような状況でも、本プロジェクトのパートナーである細野桜子さん（新内志賀桜）や TARO のスタッフとともに事業を完了できたことに感謝を申し上げる。目下のコロナ禍を古典芸能のあり方を見直すきっかけとし、今後も、ひとりでも多くの方に新内節を伝えていきたい。

資料　2020年8月19日（水）　京都新聞　朝刊　掲載記事

生で、動画で　新内節

人間国宝・鶴賀若狭掾迎え、23日公演

新内節を情感豊かに語る鶴賀若狭掾。2001年に人間国宝となった。東京を拠点に活動し、京都で生の語りが聞ける機会は珍しい

新内節の人間国宝、82歳の鶴賀若狭掾を東京から迎え、生の語りを無料で体感できる公演が23日、京都市中京区の立誠ガーデン　ヒューリックホール京都（元立誠小）で開かれる。京都で新内節を伝える新内志賀らが「コロナ禍の閉塞感に負けず、邦楽に興味を持ってもらえる転機に」と企画した。若い観客にも身近に感じてほしいと、20代の演者も舞台に抜てき。公演の模様は後日、インターネット上で動画も見られるようにし、魅力を発信する。＝敬称略

（三好吉彦）

「芸能は本来、タフなもの」と志賀は信じる。江戸時代、豊後節と呼ばれる浄瑠璃が風紀を乱すと弾圧を受け、全面禁止に。しかし、門人たちが知恵を絞り、常磐津節や新内節といった新たな系譜を生んだように、「今できることを模索すれば、新しい何かが芽生えるはず」と前を向く。

23日の公演は、伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス（京都芸術センター内）の支援を受け、志賀らが始めた「新内節の発信と保存プロジェクト」の一環。観客の定員を半分以下の80人に抑えるなど感染予防策を採って開く。コロナ禍を受けた京都市の芸術家支援の奨励金を活用し、公演映像を動画投稿サイト「ユーチューブ」で秋ごろに公開。「聞く機会が限られる新内節を、国内外の人に知ってもらうチャンスにしたい」と思いを込める。

当日は、第一人者の若狭掾が、新内節の代表曲で艶っぽい「蘭蝶」と重厚な「一谷嫩軍記」という対照的な2演目を語る。ともに江戸時代に初代若狭掾が作曲した曲を、鶴賀流十二代目家元の当代が語る趣向となる。

「蘭蝶」は、声色芸人の男・蘭蝶と、妻・お宮、遊女の三角関係を描く内容。今回は、妻が遊女に「蘭蝶と縁を切って」と頼む「お宮口説」の場を披露する。若狭掾が一人で登場人物を語り分けるメリハリ、江戸の粋が聞きどころになる。

「一谷嫩軍記」は、歌舞伎や文楽では「熊谷陣屋」の場面で知られるが、新内節では、武将の熊谷直実が、息子と同じ年頃の若武者・平敦盛を討って無常を悟る「組打」の場を大曲として扱う。命を奪われる者も、命を奪う者も、共に苦しむ姿を、新内節らしい哀切のある節で聞かせる。若狭掾に芸について尋ねるトークコーナーも設ける。

このほか志賀が「子宝三番叟」を語る。冒頭は能楽の「翁」と同じ、とうとうたらりーと厳かに始まるが、その後は、神々が愛し合って島が生まれるーという祝儀的内容を、新内節ならではのしっぽりした節も交えて、最後はにぎやかに締める。三味線は、25歳の新内志賀桜＝大津市＝ら若手を起用。志賀は「邦楽界は演者も観客も高齢化が悩みですが、若い世代の演奏姿を、ぜひ同世代の人にも見てほしい」と薦める。

新内節は、花街の座敷や流しで流行。艶やかな中棹三味線の音色に合わせ、人間の生きざまを素語りで表現する。細やかな節回しで、時に甲高い声を使って心情を切々と吐露。語りは一人で担う場合が多く、演者や流派によって個性が豊かなのも特色になっている。

コロナの自粛期間中、志賀は、24年前に亡くなった師匠の新内志賀大掾ら名人が残したカセットテープ音源を採譜。デジタルアーカイブ化する作業を進めた。「私自身も年を重ね、次の伝承者に芸をつなぐ時、きちんと整理をしてあるる方がいいですから」

弟子の志賀桜は4歳から三味線を志賀に学び、東京芸大を卒業後、現在は演奏活動と並行し、京都市立芸大で新内節の研究を進める。「新内節は、まだまだ基礎研究が進んでいない。いい曲が多く埋もれており、楽譜に残し、こつこつ伝えていきたい」。ネット世界にも明るく、動画配信などの活動もけん引。若さを生かし、新しい時代の芸の伝え方を模索している。

新内志賀。2012年に研進派家元を襲名し、京都で新内節を伝える。本名の重森三果名義でも時代劇の邦楽指導などで活躍している（京都市内）
＝撮影・辰己直史

コロナ禍と文化

京の新内志賀ら企画

若手も抜てき「邦楽　身近に感じて」

新内節は、語り手1人と三味線2人（基本の旋律を担う本手と、高音の副旋律を担う上調子）が絡む演奏が基本形になる

公演会場の立誠ガーデンは、元立誠小跡地（蛸薬師通河原町東入ル）を活用し、7月に開業したホテルなどの複合施設。東京の不動産会社ヒューリックが、京都市や立誠自治連合会と協議を重ね、図書館なども併設する形で整備した。

新内志賀は「京都と東京が協力して立誠ガーデンを作ったように、私たち京都と東京の新内人が交流する場として、ふさわしいのでは」と、会場使用を依頼。立誠ガーデンを会場に、灯籠流しや盆踊りが繰り広げられる「高瀬川夏まつり」に合わせて開くことになった。

新内節は、江戸で発展し、現在も担い手の多くが東京在住。ただ、新内節の基となった豊後節や一中節は、京都の人が創始した歴史的経緯もあり、志賀たちは「京都で新内節や邦楽を盛り上げたい」と考える。

「交流にふさわしい」場所

会場の立誠ガーデン

新内志賀桜

公演概要
23日午後3～5時。入場無料だが、伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィスのホームページ http://traditional-arts.org/から申し込みが必要。先着順で定員約80人。詳細は075（255）9600へ。